縄文時代後期前葉土器編年研究の現状と課題

―関東地方を中心とした堀之内１式周辺の研究史の整理―

文学部　民族学考古学専攻

安藤研究会　４年　千　葉　　毅

＜卒業論文要旨＞

考古学における編年研究は、個々の遺跡や遺物に正しく定まった時間的位置を与えるものであり、考古学研究の最初に手がけなければならない問題である（鈴木公雄 1988）。しかし、実際の遺物はそれを構成する時間的属性、空間的属性、社会・文化的属性など多くの要素・属性を含んでおり、その中から編年研究に使用可能な時間的属性を正しく導き出すのはしばしば容易なことではない。縄文土器編年研究にあってもそれは例外ではなく、同一資料の編年学的な位置は研究者によって多かれ少なかれ異なって捉われていることが少なくない。

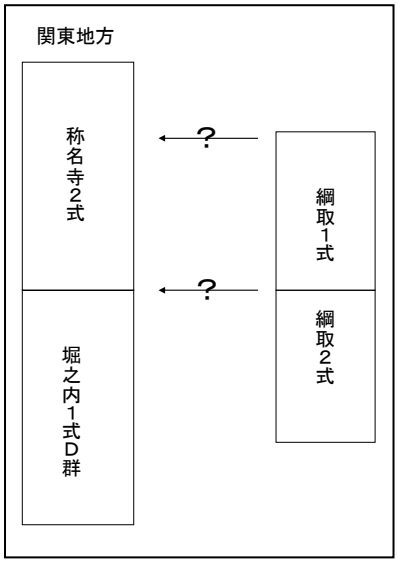
本論の対象となる縄文時代後期前葉は、土器以外にも遺跡における遺構のあり方や遺物組成などが、中期から後期への過渡期と考えられる特徴を持っており、該期においての人間集団のあり方の変化などは大変興味深い問題である。一方、当該期は古くから山内清男ら編年学派を中心に編年研究が進められてきた時期の一つであり、深い研究史を有する。しかし、現在においても、集落の動態や更には人間集団の変化などを研究する際の基礎となるべき編年体系が確立しているとは言えず、詳細な分析が困難な状況にある。また堀之内１式土器成立に大きく関与する東北地方の土器群との関わりについても未だ不明瞭な部分が多い。そのため本論では、堀之内式を中心とした縄文時代後期前葉土器―特にその編年研究が中心的に進められた関東地方を主体として―編年研究の現状における問題点を明確にするため、その歴史を整理した。

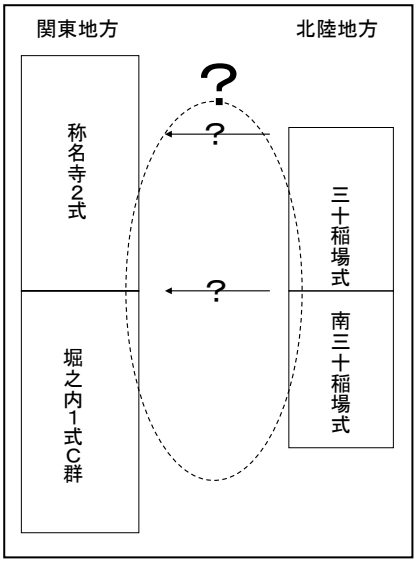
地域編年、特に関東でも称名寺式から割合スムーズに変遷のたどれる地域では石井　寛、鈴木徳雄、加納　実氏らの研究で以前に比べ高い精度を得た。しかし、堀之内１式土器最古段階理解に必要な―堀之内１式土器成立のための―東北地方との関わりについては未だ不明瞭な部分が多い。綱取式の再検討もふくめ南東北の地域編年の確立も急務となろう。そこには当然、関東地方との相互的な関わりが考えられるし、一方的な流入では理解が困難なことが予想される。またそれに加え、最近では堀之内式土器の組成を考えるときに北陸地方の三十稲場式系統土器の存在も無視し得ない状況が露呈されつつある。2002 年のシンポジウムで資料集成がなされたが、それらについての論及は未だほとんどなされていない。

また今日、土器の変遷を系統論の見方から語る方法が一般的になりつつある（鈴木徳雄 2006 など）。縄文時代の様々な画期と同じように、後期前半期もまた異なった系統の土器が複雑に絡みあった様相を見せる。そのような中では、やはり各系統において組成の地域差やその受け入れ方の差異などにも注意深く目を向けてゆく必要があろう。

＜論文構成＞

はじめに
Ⅰ　1905 年～型式設定～1940 年の研究動向
　１．型式設定以前の研究
　　a. 東京人類学会創立 20 周年記念遠足会
　　b. 上羽貞幸による発掘資料
　２．堀之内式の設定
　　a. 山内清男の研究
　　b. 八幡一郎と甲野勇の研究
　３．型式内容の充実
　　a. 矢作貝塚調査報告及び三森定男の研究
　　b. 層位的出土遺跡の集成
　４．小結
Ⅱ　1940 年～1970 年代の研究動向
　１．堀之内式細分と細分否定論
　　a. 堀之内式二細分の検討
　　b. 堀之内式二細分否定論
　２．日本人類学会 70 周年記念　堀之内貝塚発掘
　３．称名寺式をめぐる問題
　　a. 称名寺式設定
　　b. 称名寺式の存否論
　４．綱取式をめぐる問題
　５．小結
Ⅲ　1980 年代の研究動向
　１．「シンポジウム堀之内式土器」開催
　２．下北原式の提唱
　　a. 安孫子昭二の研究
　　b. 阿部芳郎の研究
　３．「称名寺式土器に関する交流研究会」開催
　４．小結
Ⅳ　1990 年以降の研究動向
　１．「第４回縄文セミナー」開催
　２．石井寛・加納実の研究
　３．鈴木徳雄の研究
　４．「第 15 回縄文セミナー」開催
　５．小結
おわりに―後期前葉土器研究の問題と課題
註
引用参考文献





主に堀之内式土器に関する研究

山内1928・1930・1936・1937

初めての型式学的位置の設定。
層位的な関係も確認されているが、資料の提示はされない。

八幡1928・1934

「堀之内式」の最初の分類説明。
設定基準の関東地方との土器組成の差異や
資料自体の脆弱さも相俟ってあまり受け継がれない。
層位情報の欠如。

甲野1935

関東地方での最初の分類説明。
層位的情報も含まれ、基本的な分類となる。

武田1938

矢作貝塚から出土した土器を甲野の分類方法で分類する。
堀之内式１式・２式の区分が意識され始めるが、層位の情報は含まれていない。

三森1939

堀之内式２大別５細分。
しかし、その根拠や層位的な関係も不明であった。

江坂1939

縄文遺跡発掘の際の層位的情報の欠落を憂い、
層位的情報が明らかにされている遺跡を集成し、その注意を促した。

山内1940

型式設定者により初めて標識的資料の公開と解説がなされる。
「新型式」「旧型式」の存在を指摘するが、層位的な情報は触れられていない。
型式に内在しうる「武蔵相模」と「下総」の地域差を指摘する。

芹沢1950・西村1954

山内1940をほぼ踏襲し、「堀之内Ｉ式・Ⅱ式」の差や地域差に言及している。
層位的情報の欠落。

吉田1956

芹沢1950を踏襲。
堀之内式土器の粗製土器として新たに
櫛歯状沈線を全面に施したものを指摘するが、
それをどのように堀之内式に位置づけたかは不明。

清水1954

発掘地点の差と自身で行った分類の組成比との関係から
土器群の前後関係を推定。甲野1935にやや近いか？

グロート1952

姥山貝塚を層位的に発掘した結果、「堀之内１式・２式」の差は
時期差ではなく、精粗の差であると判断した。
実際には、以後の調査で時期差であることは確認されたが、層位的な発掘の
必要性を強く感じさせる論であった。

石野1955・吉田1951・1958・1960・1963

称名寺貝塚の発掘から称名寺１式・２式を設定。

坪井1962・岡本1969

称名寺式は海岸部に生活の根幹を据えた
漁撈民の文化であるとした。
時期も独立したものではなく加曽利E式から堀之内式にかけての
一地方差であると考えた。

堀越1968・1971

坪井1962・岡本1969の論を踏襲。
また、自身では施文順序を追うことでこれらの論を強調した。

安孫子1971

平尾遺跡の発掘成果から、称名寺式土器は、前半が加曽利E式に併行し、
後半が堀之内１式に併行する、周辺の型式であると考えた。
また称名寺式土器と関西地方の中津式土器の類似を指摘した。

主に称名寺式土器に関する研究

山内1964

文様帯系統論の発表。

鈴木1980

文化伝播論的な視点で当該期の諸様相を説明しようとした。
後に自身で述べているように、やや単純な論になっている部分もある。

鈴木1991・1992・1993・1994

山内の文様帯系統論を丁寧に解釈し、
称名寺式を型式学的に位置づけようとする。

シンポジウム堀之内式土器1982

縄文セミナー1990

縄文セミナー2002

石井1984・1992・1993

土器群を器形と文様施文域によって群別し、それら各々の群の中での前後関係を
文様系統論的に推定した。非常に理解しやすいものであり、これ以降、石井氏のこの方法は
当該期土器研究で主流のものとなっていく。

加納2003

石井1993を論拠に千葉県武士遺跡の出土土器を分類。
関東南西部との土器組成の差などに論及する。

今村1977

称名寺式土器を１式a・b・c・２式に分け、その出自を関係付けた。
西日本の中津式土器や関東地方の加曽利E式土器との関係は
概ね説明されているが、東北地方との関連を軽視している部分があることは指摘されよう。
しかし、非常に多方面に言及、問題提起しており、これ以降の大きな指針となった。

称名寺式土器に関する交流研究会1985

これまでも度々指摘されてきた称名寺式と西日本の関係性に加え、
加曽利E式系統の土器が存続することにも論及し、新しい視点が加えられた。
称名寺式７細分の認識が研究者間で概ね一般化することになる。

安孫子1981

堀之内１式に内在する地域差を「下北原式」として分離することで整理しようとした。
しかし安易に型式を生み出してしまっただけであまり普及を見なかったといえる。

阿部1987・1988

「下北原式」を積極的に活用し、当該期の土器群を東北地方の
諸型式との関連で整理しようとした。

金子1958

吉田の分類を踏襲するも、特に粗製土器において
称名寺貝塚の土器との差を指摘。

縄文時代プロジェクトチーム2006

称名寺式の特に古い部分に関する一括資料を集成した。

下村1973・1974

柿沼1973に対する反論。複雑と言われていた称名寺式の文様を
ネガ・ポジで分類しパターン化した。称名寺式が独立した時間幅を持つ型式だと主張。

柿沼1973

自身の分類結果などを交えながら
ほぼ安孫子1971を踏襲。

青木1977・谷井1977

下村1973の論に立脚し、文様をパターン化した。
同様に称名寺式が独立した時間幅を持つと主張。

緊急大規模発掘の増加 →

＜引用参考文献＞

山内清男　1928　「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』第 43 巻第 10 号　東京人類学会
八幡一郎　1928　『南佐久郡の考古学的調査』　岡書院
山内清男　1930　「斜行縄文に関する二三の観察」『史前学雑誌』第１巻第３号　史前学会
八幡一郎　1934　『北佐久郡の考古学的調査』　岡書院
甲野　勇　1935　「関東地方に於ける縄紋式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』第７巻第３号　史前学会
山内清男　1936　「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』第１巻第４号　翰林書房
山内清男　1937　『縄文土器の細別と大別』　先史考古学会
武田宗久　1938　「下総国矢作貝塚発掘報告」『考古学』第９巻第８号　東京考古学会
三森定男　1939　「先史時代の東部日本」『人類学先史講座』第 12 巻　雄山閣
江坂輝彌　1939　「関東地方縄文式土器の層位的出土遺跡の集成」『考古学』第四巻第十号　東京考古学会
山内清男　1940　『日本先史土器図譜』第Ⅵ輯　先史考古学会
芹沢長介　1950　「後期・晩期縄文式文化」『古代土器標本解説書』第二集　ドルメン教材社
グロート＝ジェラード／篠遠喜彦 1952　『姥山貝塚』　日本考古学研究所
清水潤三　1954　「堀之内貝塚シ―Ⅰ、シ―Ⅱ地点発掘報告」『人類学雑誌』第 65 巻第５号　日本人類学会
西村正衛／玉口時雄／金子浩昌　1954　「堀之内貝塚リ、ハ、ヱ地点発掘報告」『人類学雑誌』第 65 巻第５号　日本人類学会
石野　瑛　1955　「神奈川県横浜市称名寺貝塚」『日本考古学年報』４　昭和 26 年度　日本考古学協会
吉田　格　1956　「各地域の縄文式土器　関東」『日本考古学講座』３　河出書房
吉田　格　1958　「横浜市称名寺貝塚（第二回発掘報告）」『日本考古学協会第 21 回総会　研究発表要旨』　日本考古学協会
金子浩昌・和田　哲 1958『館山鉈切洞窟の考古学的調査』　早稲田大学出版部
吉田　格　1960　『称名寺貝塚調査報告書』武蔵野郷土館調査報告書１　武蔵野郷土館
坪井清足　1962　「縄文文化論」『岩波講座日本歴史』１　岩波書店
吉田　格　1963　「神奈川県横浜市称名寺貝塚」『日本考古学年報』10　昭和 32 年度　日本考古学協会
山内清男　1964　「縄文式土器・総論」『日本原始美術１　縄文式土器』　講談社
堀越正行　1968　「称名寺式併行土器存在論」『流水文』35　明治大学考古学研究部
岡本　勇　1969　「縄文後期文化―関東」『新版考古学講座』３　雄山閣
馬目順一　1970　「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について」『考古』16　福島県立磐城高等学校史学研究クラブ
安孫子昭二 1971　「縄文時代後期初頭の諸問題」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』
堀越正行　1971　「施文系統と編年の改正（予察）」『ふれいく』２号　ふれいく同人
柿沼修平　1973　「いわゆる”称名寺式土器”に関する二・三の疑義」『史館』創刊号　史館同人
下村克彦　1973　「称名寺式土器の意匠二態」『埼玉考古』第 11 号　埼玉考古学会
下村克彦　1974　「大宮市北袋出土の称名寺式土器」『埼玉考古』第 12 号　埼玉考古学会
伊東信雄　1977　「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古学研究』第 24 巻第３・４号　考古学研究会
今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究（上）」『考古学雑誌』第 63 巻第１号
今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』第 63 巻第２号
馬目順一　1977　「いわゆる「綱取貝塚Ｃ地区」の土器について」『考古』19　福島県立磐城高等学校史学研究クラブ
小林達雄　1977　「型式、様式、形式」『日本原始美術土器大系』１
斎藤弘道　1978　「堀之内式土器研究のあゆみ」『茨城県歴史館報』5　(財)茨城県教育財団　茨城県歴史館
安孫子昭二 1981　「縄文後期の土器　関東・中部地方」『縄文土器大成』第３巻　講談社
市立市川考古博物館 1982『シンポジウム堀之内式土器資料集―各地の堀之内式土器とその変遷―』　市立市川考古博物館
石井　寛　1982　「南関東西南部」『シンポジウム堀之内式土器資料集―各地の堀之内式土器とその変遷―』　市立市川考古博物館
市立市川考古博物館 1983『シンポジウム堀之内式土器』　市立市川考古博物館
鈴木公雄　1984　「松本彦七郎論―土器研究にみる層位と型式の関係―」『縄文文化の研究』10　雄山閣
石井　寛　1984　「堀之内２式土器の研究（予察）」『調査研究集録』第５冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1985『称名寺式土器に関する交流研究会　資料集』　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
阿部芳郎　1987　「縄文時代後期前葉型式群の構造の動態―堀之内１式と東北地方の型式群の関係について―」
『駿台史学』第 71 号　駿台史学会
阿部芳郎　1988　「堀之内１式の土器の構成と変遷」『信濃』第 40 巻第４号　信濃史学会
鈴木公雄　1988　『考古学入門』　東京大学出版会
横浜市埋蔵文化財センター1990『調査研究集録』第７冊　称名寺式土器に関する交流研究会の記録　横浜市埋蔵文化財センター
稲村晃嗣　1990　「加曽利Ｅ系列の土器群」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター
縄文セミナーの会　1990　『第４回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会
鈴木徳雄　1990　「南関東」『第４回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会
阿部芳郎　1990　「北陸北半地域における後期前葉土器型式の再検討―三十稲場式、南三十稲場式の構成と変遷―」
『信濃』第 42 巻第 10 号　信濃史学会
鈴木徳雄　1991　「称名寺式の変化と文様帯の系統―「文様帯系統論」と文様帯連続説の再検討―」
『土曜考古』第 16 号土曜考古学研究会
鈴木徳雄　1992　「縄紋後期注口土器の成立―形態変化と文様帯の問題―」『縄文時代』第３号　縄文時代文化研究会
石井　寛　1992　「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第９冊　（財）横浜市ふるさと歴史財団
石井　寛　1993　「堀之内１式期土器に関する問題」『牛ヶ谷遺跡　華蔵台南遺跡』　（財）横浜市ふるさと歴史財団
鈴木徳雄　1998　「称名寺式の文様変化と論理―称名寺式と堀之内１式の文様構造―」
『東海大学校地内遺跡調査団報告』８東海大学校地内遺跡調査団
鈴木徳雄　1999　「称名寺式関沢類型の後裔―堀之内１式期における小仙塚類型群の形成―」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
縄文セミナーの会 2002『第 15 回縄文セミナー　縄文後期前半の再検討』　縄文セミナの会
加納　実　2003　「縄文時代後期堀之内１式土器の系統分析」『貝塚博物館紀要』第 30 号　千葉市立加曽利貝塚博物館
鈴木徳雄　2006　「縄文後期称名寺式の成立と変化―異系統土器の移入と伝習の過程―」『公開研究発表会　異系統土器の出会い―土器研究の新しい可能性をもとめて―　発表要旨』　科研費補助金（基盤Ｂ）課題「異系統土器の出会い」研究班
縄文時代研究プロジェクトチーム　2006　「神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ―後期初頭期　称名寺式土器文化の様相　その１―　―主要遺跡の集成・一括出土事例―」『かながわの考古学　研究紀要』第 11 号　（財）かながわ考古学財団